

平成30年度事業報告

目標 基礎的なことを着実にやる

【総括】

平成30年度は、医療報酬と介護報酬のダブル改定の年で、法人にとっては概ね増収となりました。在宅部門は、6月に居宅介護支援事業所を泰星苑・月明館のある上南の拠点へ移し、3つの事業所がより連携が取りやすくなりました。また、施設入居や死亡等で利用者の入れ替わりがある中で、月明館は登録者数を増やすのは難しかったですが、鐘ヶ丘居宅と泰星苑はそれぞれ利用者数を増やすことができました。

職員の育成に関しては、昨年度見直しを行った、コンピテンシー（仕事のできる職員の行動基準）による人事考課制度の運用をはじめました。育成担当アシスタントも初めての試みで、試行錯誤の1年でした。職員の個性も様々で、なかなか育成には時間がかかる人もいるため、成果については、1年間だけで測ることが難しいですが、外部研修等も利用して、リーダー育成に特に力を入れた年でした。

社会貢献に関しては、中高生や認知症介護研修実習生の受け入れ、地域交流会や認知症サポーター養成講座、サロン活動の支援等を行いました。特に例年よりもサロンの支援は多く行いました。法人が熊本県から委託されている『若年性認知症受入促進研修』『熊本モデル若年性認知症対応力向上支援事業』は、県南の担当として、新たに水俣地域での啓発研修を行いました。その他、あさぎり町介護事業所連絡会（Sネット）の一員として、RUN伴（認知症啓発タスキリレー）や家族介護教室、多職種連携研修会を協力して行いました。

1. 介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム 鐘ヶ丘ホーム）

『日々の暮らしを責任と謙虚な気持ちで支えます』の理念の基に入居者様がご自身の有する能力を可能な限り活かしながら、その人らしい生活を継続できるよう日常生活動作訓練を機能訓練指導員が中心となって積極的に実施することができました。

年々重度化が進む中、より個別ケアをしやすい環境にするためのユニットの再編成は人員配置等検討を行い、次年度の継続検討課題となりましたが、入居者様に対し更に専門性を活かした関わりができるように、誰でもできる仕事と専門性の高い仕事を分けて業務分担する仕組みづくりをスタートすることができました。

また、施設での看取りは2件で、嘱託医の指示のもと部署間で連携を取り、ご

家族と共に最期を見守り、お見送りすることができました。

2. 地域密着型介護老人福祉施設

(地域密着型特別養護老人ホーム 鐘ヶ丘ホームいちふさ)

『出会いに感謝し共に生きる』の理念を基に個室ユニット型を活かした個別ケアもさらに安心、安全で、自立支援、重度化防止に努め、その人らしい生活を継続できるよう日常生活動作訓練を機能訓練指導員が中心となって積極的に実施することができました。

地域密着型として地域やご家族との結びつきを大切にした支援を心掛け、ユニット独自の家族会を初めて開催することができました。ご家族のアンケートを基に実施することで、よりご家族とのコミュニケーションを密にし、信頼関係を築くことができました。

また、施設での看取りは1件で、嘱託医の指示のもと部署間で連携を取り、ご家族と共に最期を見守り、出会いに感謝しながらお見送りすることができました。

3. 短期入所生活介護（鐘ヶ丘ホーム）

ご利用者が利用されている目的を理解することに務め、担当居宅介護支援専門員、ご家族との連携を密に、情報を共有し、ご利用者の在宅生活を支えるよう努めました。

また、ショートステイ単独の家族会を初めて開催し、ご利用者の在宅生活の状況確認やご家族との信頼関係を築くことができ、ご家族間の交流の場としての機会ともなりました。

ご利用者の重度化や特養待機者の長期利用の増加を受け、ショートステイでの看取り受入れのガイドラインを定め、受入れ態勢を整えることができました。

4. 居宅介護支援事業所（鐘ヶ丘居宅介護支援事業所）

医療保険と介護保険の同時改定や、その他法令に従った適切なマネジメントを行っていくように努めました。居宅管理者には主任介護支援専門員の資格要件が課せられることになったので、研修を受け、主任介護支援専門員となりました。

また、法人内の在宅部門の連携強化を図るために、事業所の住所を変更し、泰星苑・月明館のある拠点へと移し、利用者増に向けての目標をたてて達成させることが出来ました。

今年度から、居宅介護支援事業所の保険者が、熊本県からあさぎり町へと移行し、あさぎり町からの初めての監査を受けました。その前にも、初めてのサ

ービス満足度調査を行い、そこで見えてきた課題についての取り組みをはじめました。変化の多い1年でしたが、目標をたてて実行し、達成することができた実り多い1年でした。

5. 地域密着型通所介護事業所（デイサービス泰星苑）

制度改定による影響は、それほどありませんでした。自立支援を目指して、利用者の『やりたいこと』『できること』を増やせるように支援してまいりました。1名の方が介護度が下がりましたが、利用者の平均年齢があがっていくなかで体調を崩されたり、入院したりも多かった年でした。利用者の高齢化・重度化はあるものの、活動のメニューも、個々人に合わせたものを試行錯誤しながら増やしていくことができました。

また、地域交流会、RUN 伴、サロン活動の支援、子供たちとの交流会、中高生の実習受入を他の在宅部門の事業所と協力して行いました。

6. 小規模多機能居宅介護事業所（小規模多機能ホーム月明館）

年間通してみると、昨年度と同じで平均6割の登録者数でした。ですが、利用者は入れ替わっていて、入院や施設入居で利用終了された方と新規利用の方と6名ずつの同数でした。新規の獲得のためには、病院や老健へのPRを行い、在宅復帰を支える小規模多機能ならではの機能をアピールしました。また、訪問件数が昨年度と比べて増えており、月200件を超えるようになっています。

8月に新しく資格を取ったケアマネージャーと交代し、スムーズに引き継ぎもできました。今年度は、運営推進会議を通じて丁寧に外部評価を実施して、事業所の改善点や新しい目標について、推進員の皆様より貴重なご意見をいただきました。また、地域交流会、RUN 伴、サロン活動の支援、子供たちとの交流会、中高生の実習受入を他の在宅部門の事業所と協力して行いました。